

クララの出家

有島武郎

青空文庫

これも正しく人間生活史の中に起つた実際の出来事の一つである。

○

○

また夢に襲われてクララは暗い中^{うち}に眼をさました。妹のアグネスは同じ床の中で、姉の胸によりそつてすやすやと静かに眠りつづけていた。千二百十二年の三月十八日、救世主のエルサレム入

城を記念する棕櫚しゆろの安息日あんそくびの朝の事。

数多い見知り越しの男たちの中で如何どういう訳か三人だけがつきつきにクララの夢に現れた。その一人はやはりアツシジの貴族で、クララの家からは西北に当る、ヴィヤ・サン・パオロに住むモントルソリ家のパオロだった。夢の中にも、腰に置いた手の、指から肩に至るしなやかさが眼についた。クララの父親は期待をもつた微笑を頬ほおに浮べて、品よくひかえ目めにしているこの青年を、もつと大胆に振舞えと、励ますように見えた。パオロは思い入ったようにクララに近づいて来た。そして仏蘭西フランスから輸入されたと思われる精巧な頸飾くびかざりりを、美しい金象眼きんぞうがんのしてある青銅の箱から取出して、クララの頸に巻こうとした。上品で端麗な若い青年

の肉体が近寄るに従つて、クララは甘い苦痛を胸に感じた。青年が近寄るなと思つたとクララはもう上気して軽い瞑眩めまいに襲われた。胸の皮膚はくすぐ撥られ、肉はしまり、血は心臓から早く強く押出された。胸から下の肢体したいは感觸を失つたかと思つうほどこわばつて、その存在を思ふ事にすら、消え入るばかりの羞恥しゆうちを覚えた。毛の根は汗ばんだ。その美しい暗緑の瞳ひとみは、涙よりももつと輝く分泌物の中に浮き漂つた。軽く開いた唇くちびるは熱い息気いきのためにかさかさになった。油汗の沁しみ出た両手は氷のように冷えて、青年を押もどそうにも、迎え抱こうにも、力を失つて垂れ下つた。肉体はややともすると後ろに引き倒されそうになりながら、心は遮しや二無むに二前の方に押し進もうとした。

クララは半分気を失いながらもこの恐ろしい魔術のような力に抵抗しようとした。破滅が眼の前に迫った。深淵が脚の下に開けた。そう思つて彼女は何とかせねばならぬと悶えながらも何んにもしないでいた。慌て戦く心は潮のあわおののうしおのように荒れ狂いながら青年の方に押寄せた。クララはやがてかのしなやかなパオロの手を自分の首に感じた。熱い指先と冷たい金属とが同時に皮膚に触れると、自制は全く失われてしまった。彼女は苦痛に等しい表情を顔に浮かべながら、眼を閉じて前に倒れかかった。そこにはパオロの胸があるはずだ。その胸に抱き取られる時にクララは元のクララではなくなるべきはずだ。

もうパオロの胸に触れると思つた瞬間は来て過ぎ去つたが、不

思議にもその胸には触れないでクララの体は抵抗のない空間に傾
 き倒れて行つた。はつと驚く暇もなく彼女は何所とも判らない深
 みへ 驀まつしぐら 地に陥つて行くのだった。彼女は眼を開こうとした。
 しかしそれは堅く閉じられて盲目めしいのようだった。真暗な闇の間を、
 颯風ぐくふうのような空気の抵抗を感じながら、彼女は落ち放題に落ちて
 行つた。「地獄に落ちて行くのだ」胆きもを裂くような心 咎とがめが
 突然クララを襲つた。それは本統ほんとうはクララが始めから考えてい
 た事なのだ。十六の歳としから神の子基キリスト督しもべの婢女として生き通そう
 と誓つた、その神聖な誓せいごん言ごんを忘れた報いに地獄に落ちるのに何
 の不思議がある。それは覚悟しなければならぬ。それにしても聖
 処女によつて世に降誕した神の子基督の御顔を、金輪際こんりんざい拜し得

られぬ苦しみは忍びようがなかった。クララはとんぼがえりを打つて落ちながら一心不乱に聖母を念じた。

ふと光つたものが眼の前を過ぎて通つたと思つた。と、その両り

肱ようひじは柵たなのようなものに支えられて、膝ひざがしらも堅い足場を得

ていた。クララは改かいし悛ゆん者しやのように啜すすり泣りきながら、柵らしい

ものの上に組み合せた腕の間に顔を埋めた。

泣いてる中うちにクララの心は忽たちまち軽くなつて、やがては十ばかり

の童女の時のような何事も華やかに珍らしい気分になつて行つた。突然華やいだ放胆な歌声が耳に入った。クララは首をあげて好奇

の眼を見張つた。両肱は自分の部屋の窓枠に、両膝は使いなれたかし長椅子ながいすの上に乗っていた。彼女の髪は童女の習慣どおり、侍べ

童コウのように、肩あたりまでの長さきりさげに切下にしてあつた。窓からは、朧おぼろ夜の月の光の下に、この町の堂母ドモなるサン・ルフィノ寺院とその前の広場とが、滑かな陽春の空氣に柔らめられて、夢のように見渡された。寺院の北側をロツカ・マジョーレの方に登るさか阪を、一つの集団となつてよろけながら、十五、六人の華車きやしやな青年が、声をかぎりに青春を讚美する歌をうたつて行くのだった。クララはこの光景を窓から見おろすと、夢の中なかにありながら、これは前に一度目撃した事があるのと思つていた。

そう思うと、同時に窓の下の出来事はこずんずんクララの思う通りにはかどつて行つた。

夏には夏の我れを待て。

春には春の我れを待て。

夏には隼たかを腕たかに据えよ。

春には花に口を触れよ。

春なり今は。春なり我れは。

春なり我れは。春なり今は。

我がめぐわしきおとめ少女。

春なる、ああ、この我れぞ春なる。

寝むとんじやくしずまった町まちなみ並なみを、張りのある男声の合唱が鳴りひびくと、
無頓着むとんじやくな無恥な高笑いがそれに続いた。あの青年たちはもう立

止る頃だとクララが思うと、その通りに彼らは突然阪の途中で足をとめた。互に何か探し合っているようだったが、やがて彼らは広場の方に、「フランシス」「ベルナルドーネの若い騎士」「円パンサ・ロトンダ」卓な子の盟主」などと声々に叫び立てながら、はぐれた伴侶を探しにもどつて来た。彼らは広場の手前まで来た。そして彼らの方に二十二、三に見える一人の青年が夢遊病者のように足もともしどろに歩いて来るのを見つけた。クララも月影でその青年を見た。それはコルソの往還を一つへだてたすぐ向うに住むベルナルドーネ家のフランシスだった。華美を極めた晴着の上に定じょうも紋もんをうった蝦えび茶ちやのマントを着て、飲み仲間の主権者たる事を現しやくわす笏しやくを右手に握った様子は、ほかの青年たちにまさった無頼ぶらい

の風俗だったが、その顔は瘦せ衰えて物凄^やいほど青く、眼は足もとから二、三間さきの石畳を孔^{あな}のあくほど見入ったまま瞬^{またた}きもしなかつた。そしてよろけるような足どりで、見えないものに引ずられながら、堂母^{ドーム}の広場の方に近づいて来た。それを見つけると、引返して来た青年たちは一度にときをつくつて駈^かけよりざまにフランスを取かこんだ。「フランス」 「若い騎士」などとその肩まで揺^ゆつて呼びかけても、フランスは恐^{おそ}ろげな夢からさめる様子はなかつた。青年たちはそのていたらくにまたどつと高笑いをした。「新妻^{にいづま}の事でも想像して魂がもぬけたな」一人がフランスの耳に口をよせて叫んだ。フランスはついた狐^{きつね}が落ちたようにきよんととして、石畳から眼をはなして、自分を囲むいく

つかの酒にほてった若い笑顔を苦々しげに見廻わした。クララは即興詩でも聞くように興味を催^{もよ}おして、窓から上体に乗出しながらそれに眺め入った。フランシスはやがて自分の纏^{まと}ったマントや手に持つ^{しやく}笏に気がつく^{はじ}くと、甫^{はじ}めて今まで耽^{ふけ}っていた歓楽の想^{おもい}出の糸口が見つかったように苦笑いをした。

「よく飲んで騒^{もら}いだもんだ。そうだ、私は新妻の事を考えている。しかし私が貰^{もら}おうとする妻は君らには想像も出来ないほど美しい、富裕な、純潔な少女なんだ」

そういつて彼れは笏を上げて青年たちに一足先きに行けと眼で合図した。青年たちが騒^{どーも}ぎ合いながら堂母の蔭に隠れるのを見届けると、フランシスはいまいましたげに笏を地に投げつけ、マント

と晴着とをずたずたに破りすてた。

次の瞬間にクララは錠のおりた堂母ドーマの入口に身を投げかけて、犬のようにまろびながら、悔恨の涙にむせび泣く若いフランシスを見た。彼女は奇異の思いをしながらそれを眺めていた。春の月は朧おぼろに霞かすんでこの光景を初めからしまいまで照している。

寺院の戸が開いた。寺院の内部は闇で、その闇は戸の外に溢れ出るかと思うほど濃かった。その闇の中から一人の男が現われた。十歳の童女から、いつの間にか、十八歳の今のクララになって、年に相当した長い髪を編下げにして寝衣ねまきを着たクララは、恐怖の予覚を持ちながらその男を見つめていた。男は入口にうづくまるフランシスに眼をつけると、きつとクララの方に鋭い眸ひとみを向けた。

が、フランシスの襟えりもと元を掴つかんで引きおこした。ぞろぞろと華やかな着物だけが宙につるし上つて、肝腎かんじんのフランシスは溶けたのか消えたのか、影も形もなくなっていた。クララは恐ろしい衝動を感じてそれを見ていた。と、やがてその男の手に残った着物が二つに分れて一つはクララの父となり、一つは母となった。そして二人の間に立つその男は、クララの許いいなずけ婚のオツタヴィアナ・フォルテブラツチョだった。三人はクララの立っている美しい芝生より一段低い沼地がかった黒土くろつちの上に単調にずらつとならんで立っていた——父は脅おびやかすように、母は歎くように、男は怨うらむように。戦たたかの街いを幾度もくぐつたらしい、日に焼けて男性的なオツタヴィアナの顔は、飽く事なき功名心と、強い意志と、生き

いっほん

一本な氣象とで、固い輪郭りんかくを描いていた。そしてその上を貴

族的な誇りが包んでいた。今まで誰れの前にも弱味を見せなかつたらしいその顔が、恨みを含んでじつとクララを見入っていた。

クララは許婚の仲であるくせに、そしてこの青年の男らしい強さを尊敬しているくせに、その愛をおとなしく受けようとはしなかつたのだ。クララは夢の中にありながら生れ落ちるとから神かみに獻ささげられていたような不思議な自分の運命を思いやった。晩おそかれ早かれ生みの親を離れて行くべき身の上も考えた。見ると三人は自分の方に手を延ばしている。そしてその足は黒土の中にじりじりと沈みこんで行く。脅かすような父の顔も、歎くような母の顔も、怨むようなオツタヴィアナの顔も見見る変つて、眼せまに逼る難儀

を救ってくれと、恥も忘れて叫ばんばかりにゆがめた口を開いている。しかし三人とも声は立てずに死のように静かで陰鬱いんうつだった。クララは芝生の上からそれをただ眺めてはいられなかった。口まで泥の中に埋まって、涙を一ぱいためた眼でじつとクララに物をいおうとする三人の顔の外ほかに、果てしのないその泥の沼には多くの男女の頭が静かに沈んで行きつつあるのだ。頭が沈みこむとぬるりと四方からその跡を埋めに流れ寄る泥の動揺は身の毛をよだてた。クララは何もかも忘れて三人を救うために泥の中に片足を入れようとした。

その瞬間に彼女は真黄まっきいに照り輝く光の中に投げ出された。芝生も泥の海ももうそこにはなかった。クララは眼がくらみながら

も起き上がろうともがいた。クララの胸を掴んで起させないものがあつた。クララはそれが天使ガブリエルである事を知つた。

「天国に嫁ぐとつためにお前は浄めきよられるのだ」そういう声が聞こえたと思つた。同時にガブリエルは爛らんらん々と燃える炎の剣をクララの乳房の間からずぶりとさし通した。燃えさかつた尖きつ頭さきは下腹部まで届いた。クララは苦悶うちの中に眼をあげてあたりを見た。まぶしい光に明滅して十字架にかかつた基キリスト督の姿が厳かに見やられた。クララは有頂天になつた。全身はかつて覚えのない苦しい快い感覚に木の葉ばの如ごとくおののいた。喉のども裂け破れる一声に、全身にはり満ちた力を搾しぼり切ろうとするような瞬間が来た。その瞬間にクララの夢はさめた。

クララはアグネスの眼をさまさないようにそつと起き上つて窓から外を見た。眼の下には夢で見たとおりのルフィノ寺院があかつ暁きやみ闇の中に厳かな姿を見せていた。クララは扉をとびらあけて柔かい春の空気を快く吸い入れた。やがてポルタ・カプチイニの方にかすかな東明しのめの光が漏れたと思うと、救世主のエルサレム入城を記念する寺の鐘が一時に鳴り出した。快活な同じ鐘の音は、麓ふもとの町からも聞こえて来た、牡鷄おんどりが村から村に時鳴ときを啼なき交すように。今日こそは出家してキリスト基督に嫁ぐべき日だ。その朝の浅い眠りを覚ました不思議な夢も、思い入った心には神の御告げに違いなかった。クララは涙ぐましい、しめやかな心になってアグネスを見た。十四の少女は神のように眠りつづけていた。

部屋は静かだった。



クララは父母や妹たちより少しおくれて、朝の礼拝れいはいに聖ルフイノ寺院に出かけて行つた。在家ざいけの生活の最後の日だと思つたと、さすがに名残なごりが惜しまれて、彼女は心を凝らして化粧をした。

「クララの光りの髪」とアツシジで歌われたその髪を、真珠紐しんじゆひもで編んで後ろに垂れ、ベネチヤの純白な絹を着た。家の者のいなすきい隙に、手早く置手紙と形見の品物を取りまとめ、机の引出しにしまった。クララの眼にはあとからあとから涙が湧き流れた。眼

に触れるものは何から何までなつかしまれた。

一人の婢女はしためを連れてクララは家を出た。コルソの通りには織るように人が群れていた。春の日は麗うららかに輝いて、祭日の人心を更らに浮き立たした。男も女も僧侶もクララを振りかえって見た。

「光りの髪のクララが行く」そういう声があちらこちらで私語ささやかれた。クララは心の中で主の祈を念仏のように繰返し繰返しひたすらに眼の前を見つめながら歩いて行つた。この雑ざつ鬧とうな往来の中でも障しょうがい碍がいになるものは一つもなかった。広い秋の野を歩くように彼女は歩いた。

クララは寺の入口を這はい入るとまっすぐにシツファイ家の座席に行つてアグネスの側に坐を占めた。彼女はフォルテブラッチヨ家の

座席からオツタヴィアナが送る視線をすぐに左の頬に感じたけれども、もうそんな事に頓着とんじやくはしていなかった。彼女は座席につくと面おもてを伏せて眼を閉じた。ややともすると所わきまも弁えずに熱い涙が眼がしらににじもうとした。それは悲しさの涙でもあり喜びの涙でもあつたが、同時にどちらでもなかった。彼女は今まで知らなかつた涙が眼を熱くし出すと、妙に胸がわくわくして来て、急に深淵のような深い静かさが心を襲つた。クララは明かな意識の中にありながら、凡すべてのものが夢のように見る見る彼女から離れて行くのを感じた。無一物な清しやうじやう浄な世界にクララの魂だけが唯一ただ一つ感激に震えて燃えていた。死を宣告される前のような、奇怪な不安と沈静とが交かわる交かわる襲つて来た。不安が沈静に代る度

にクララの眼には涙が湧き上った。クララの処女らしい体は蘆あしの葉のように細かくおののいていた。光りのようなその髪もまた細かに震えた。クララの手は自らアグネスの手をおのずか覓もとめた。

「クララ、あなたの手の冷たく震える事」

「しつ、静かに」

クララは頼りないものを頼りにしたのを恥じて手を放した。そして咽むせるほどの参詣さんけい人の人いきれの中でまた孤独に還った。

「ホザナ……ホザナ……」

内陣から合唱が聞こえ始めた。会衆の動揺は一時に鎮しずまって座席を持たない平民たちは敷石の上にひざまず跪いた。開け放した窓からは、柔かい春の光と空気とが流れこんで、壁に垂れ下った旗なや旒がを静

かになぶつた。クララはふと眼をあげて祭壇を見た。花に埋められ香をたきこめられてビザンチン型の古い十字架聖像が奥深くすえられてあつた。それを見るとクララは咽せ入りながら「アーメン」と心に称えて十字を切つた。何んという貧しさ。そして何んという慈愛。

祭壇を見るとクララはいつでも十六歳の時の出来事を思い出さずにはいかなかった。殊にこの朝はその回想が厳しく心に逼つた。

今朝の夢で見た通り、十歳の時眼のあたり目撃した、ベルナルドーネのフランシスの面影はその後クララの心を離れなくなつた。フランシスが狂気になつたという噂さも、父から勘当を受けて乞食の群に加わつたという風聞も、クララの乙女心を不思議に

強く打つて響いた。フランシスの事になるとシツファイ家の人々は父から下女の末に至るまで、いい笑い草にした。クララはそういう雑言ぞうごんを耳にする度に、自分でそんな事を口走つたように顔を赤らめた。

クララが十六歳の夏であつた、フランシスが十二人の伴侶なかまと羅馬ローマに行つて、イノセント三世から、基督キリストを模範にして生活する事と、寺院で説教する事との印可いんかを受けて歸つたのは。この事があつてからアツシジの人々のフランシスに対する態度は急に変わった。ある秋の末にクララが思い切つてその説教を聞きたいと父に歎願した時にも、父は物好きな奴だといつたばかりで別にとめはしなかつた。

クララの回想とはその時の事である。クララはやはりこの堂母ドームのこの座席に坐っていた。着物を重ねても寒い秋寒に講壇には真まっばだかな裸らけいなレオというフランシスの伴侶なかまが立っていた。男も女もこの奇異な裸形らけいに奇異な場所で出遇つて笑いくずれぬものはなかった。卑しい身分の女などはあからさまに卑猥ひわいな言葉をその若い道士に投げつけた。道士は凡ての反感うちかに打克うちかつだけの熱意を以て語ろうとしたが、それには未だ少し信仰が足りないように見えた。クララは顔を上げ得なかつた。

そこにフランシスがこれも裸形のままはいで這入はいつて来てレオに代つて講壇に登つた。クララはなお顔をえ得え上げなかつた。

「神、その独ひとりご子、聖靈及び基督の御弟子みでしの頭かしらなる法皇の御許に

よつて、末世の罪人、神の召によつて人を喜ばずかるわざし輕業師なるフランシスが善良なアツシジの市民に告げる。フランシスは今日教友のレオに堂母ドーモで説教するようにといつた。レオは神を語るだけの弁才を神から授さづかつていないと拒こぼんだ。フランシスはそれなら裸になつて行つて、体で説教しろといつた。レオは雄々おおしくも裸になつて出て行つた。さてレオが去つた後、レオにかかるくぎよう苦行を強いながら、何事もなげに居残つたこのフランシスを神は厳しく鞭むちうち給うた。眼ある者は見よ。懺悔ざんげしたフランシスは諸君の前に立つ。諸君はフランシスの裸形を憐あはれまるるか。しからは諸君が眼を注いで見ねばならぬものが彼所かしこにある。眼あるものは更に眼をあげて見よ」

クララはいつの間にか男の裸体と相對している事も忘れて、フランスを見やっていた。フランスは「眼をあげて見よ」といふと同時に祭壇に安置された十字架聖像をクルシ・フィッキルウヤウヤ恭しく指した。十字架上の基督は痛ましくも瘦せやこけた裸形のまままで会衆を見下ろしていた。二十八のフランスは何所どこといつて際立つて人眼を引くよ
うな容貌を持つていなかつたが、きとう祈禱と、だんじき断食と、労働のため
にやつれた姿は、靈化した彼れの心をそのまま写し出していた。
長い説教ではなかつたが神の愛、ひんきゆう貧窮の祝福などを語つて彼
がアーメンといつて口をつぐんだ時には、人々の愛心がどん底か
らゆすりあげられて思わず互に固い握手をしてすすり泣いていた。
クララは人々の泣くようには泣かなかつた。彼女は自分の眼が燃

えるように思った。

その日彼女はフランシスに懺悔ざんげの席つらなに列つらなる事を申しこんだ。懺悔するものはクララの外ほかにも沢山いたが、クララはわざと最後を選んだ。クララの番が来て祭壇の後ろの آپスに行くと、フランシスはただ一人 獣けもの色いろといわれる樺かば色いろの百姓服を着て、繩の帯を結んで、胸の前に組んだ手を見入るように首を下げて、壁添いの腰かけにかけていた。クララを見ると手まねで自分の前にある椅子いすに坐れと指した。二人は向いあつて坐つた。そして眼を見合わせた。

曇つた秋の午後のアプスは寒く淋しく暗みわた亘わたつていた。ステインド・グラスから漏れる光線は、いくつかの細長い窓を暗く彩いろどつ

て、それがクララの髪の毛に来てしめやかに戯れた。恐ろしいほどにあたりは物静かだった。クララの燃える眼は命の綱のようにフランススの眼にすがりついた。フランススの眼は落着いた愛に満ち満ちてクララの眼をかき抱くようにした。クララの心は酔いしれて、フランススの眼を通してその尊い魂を拝もうとした。やがてクララの眼に涙が溢れるほどたまつたと思ふと、ほろほろと頬を伝つて流れはじめた。彼女はそれでも真まっこう向にフランススを見守る事をやめなかつた。こうしてまたいくらかの時が過ぎた。クララはただ黙つたままで坐っていた。

「神の処女むすめ」

フランススはやがて厳かにこういった。クララは眼を外にうつ

すことが出来なかつた。

「あなたの懺悔は神に達した。神は嘉よみし給うた。アーメン」

クララはこの上控えてはいられなかつた。椅子からすべり下りると敷石の上に身を投げ出して、思い存分泣いた。その小さい心臓は無上の歓喜のために破れようとした。思わず身をすり寄せて、素足のままのフランススの爪先きに手を触れると、フランススは静かに足を引きすぎらせながら、いたわるように祝福するように、彼女の頭に軽く手を置いて間遠まじおにつぶやき始めた。小雨の雨垂れこさめのようにその言葉は、清く、小さく鋭く、クララの心をうった。

「何よりもいい事は心の清く貧しい事だ」

独語のようなささやきがこう聞こえた。そして暫しばらく沈黙が続

いた。

「人々は今のままで満足だと思っている。私にはそうは思えない。あなたもそうは思わない。神はそれをよしと見給うだろう。兄弟の日、姉妹の月は輝くのに、人は輝く喜びを忘れている。雲雀はひばり歌うのに人は歌わない。木は跳おどるのに人は跳らない。淋しい世の中だ」

また沈黙。

「沈黙は貧しさほどに美しく尊い。あなたの沈黙を私は美酒うまざけのように飲んだ」

それから恐ろしいほどの長い沈黙が続いた。突然フランスはふる慄える声を押鎮めながらつぶやいた。

「あなたは私を恋している」

クララはぎよつとして更あらためて聖者を見た。フランシスは激しい心の動揺から咄とつさ嗟の間に立ちなおっていた。

「そんなに驚かないでもいい」

そういつて静かに眼を閉じた。

クララは自分で知らなかった自分の秘密をその時フランシスによつて甫はじめて知った。長い間の不思議な心の迷いをクララは種いろい々に解ろきわずらっていたが、それがその時始めて解かれたのだ。クララはフランシスの明察を何んと感謝していいのか、どう詫わびねばならぬかを知らなかった。狂気のような自分の泣き声ばかりがクララの耳にやや暫らくいたましく聞こえた。

「わが神、わが凡^{すべ}て」

また長い沈黙がつづいた。フランシスはクララの頭に手を置きそえたまま黙^{もくとう}禱^{とう}していた。

「私の心もおののく。……私はあなたに値しない。あなたは神に行く前に私に寄道した。……さりながら愛によつてつまずいた優しい心を神は許し給うだろう。私の罪をもまた許し給うだろう」

かくいつてフランシスはすつと立上つた。そして今までとは打つて變つて神々^{こうごう}しい威厳でクララを押しながら言葉を続けた。

「神の御名^{みな}によりて命ずる。永久^{とこしえ}に神の清き愛児^{まなご}たるべき処女^{おとめ}よ。腰に帯して立て」

その言葉は今でもクララの耳に焼きついて消えなかつた。そし

てその時からもう世の常の処女ではなくなっていた。彼女はその時の回想に心を上うわずらせながら、その時泣いたように激しく泣いていた。

ふと「クララ」と耳近くささや囁くアグネスの声に驚かされてクララは顔を上げた。空想の中に描かれていたアプスの淋しさとは打つて変つて、堂内にはひしひしと群集がひしめいていた。祭壇の前に集つた百人に余る少女は、棕櫚しゆろの葉の代りに、月桂樹の枝と花束とを高くかざしていた——夕ゆう榮ぼえの雲が柵たなび引いたように。クララの前にはアグネスを従えて白い髻ひげを長く胸に垂れた盛装の僧そうじ正ようが立っている。クララが顔を上げると彼れは慈悲深げにほほえんだ。

「嫁とつぎ行く処おとめ女よ。お前の喜びの涙に祝福あれ。この月桂樹は僧正によつて祭壇から特にお前に齎もたらされたものだ。僧正の好意と共に受けおさめるがいい」

クララが知らない中うちに祭事は進んで、最後の儀式即ち参詣の処女に僧正手ずから月桂樹を渡して、救世主の入城を頌しょうか歌する場合になつていたので。そしてクララだけが祭壇に來なかつたので僧正自らクララの所に花を持って來たのだつた。クララが今夜出家するといふ手筈てはずをフランスから知らされていた僧正は、クララによそながら告別を与えるためにこの破格な処置をしたのだと気が付くと、クララはまた更らに涙のわき返るのをとどめ得なかつた。クララの父母は僧正の言葉をフォルテブラツチヨ家との縁

談と取つたのだろう、笑みかまけながら挨拶の辞儀をした。

やがて百人の処女の喉のどから華々しい頌歌が起つた。シオンの山の凱歌がいかを千年の後に反響さすような熱と喜びのこもつた女声高音が内陣から堂内を震動さして響ひびき亘わたつた。会衆は轟こわく惑されて聞きき惚ほれていた。底の底から清められ深められたクララの心は、露ばかりの愛のあらわれにも嵐のように感動した。花の間に顔を伏せて彼女は少女の歌声に揺られながら、無我の祈祷に浸り切つた。

○

「クララ……クララ」

クララは眼をさましていたけれども返事をしなかった。幸に母のいる方には後ろ向けに、アグネスに寄り添って臥ねていたから、そのまま息いき気を殺して黙っていた。母は二人ともよく寝たもんだというような事を、母らしい愛情に満ちた言葉でいって、何か衣裳らしいものを大椅子の上にそっくり置くと、忍び足に寝台に近よってしげしげと二人の寝姿を見守った。そして夜着をかけ添えて軽く二つ三つその上をたたいてから静かに部屋を出て行った。

クララの枕はしぼるように涙に濡れていた。

無むげつ月の春の夜は次第ふに更けた。町の諸門をとじる合あ図の鐘は二時間も前に鳴ったので、コルソに集って売買に忙いそがしかった村の人々の声こゝろ高たかな騒さわぎも聞こえず、軒のきなみの店ももう仕舞しまって寝し

ずまったらしい。女猫めねこを慕う男猫の思い入ったような啼なき声こゑが時折り聞こえる外ほかには、クララの部屋の時計の重子おもりが静かに下りて齒車をきしらせる音ばかりがした。山の上の春の空気はなごやかに静かに部屋に満ちて、堂母ドームから二人が持つて帰った月桂樹と花束の香を隅々すみずみまで籠こめていた。

クララは取りすぎるように祈りに祈った。眼をあけると間近かにアグネスの眠った顔があつた。クララを姉とも親とも慕う無邪気な、素直な、天使のように淨きよらかなアグネス。クララがこの二、三日ややともすると眼に涙をためているのを見て、自分も一緒に涙ぐんでいたアグネス。……そのアグネスの睫毛まつげはいつでも涙で洗ったように美しかった。殊に色白なその頬は寝入ってから健康

そうに上気して、その間に形よく盛り上った小鼻は穏やかな呼吸と共に微細に震えていた。「クララの光の髪、アグネスの光の眼」といわれた、無類な潤みを持った童女にしてはどこか哀れな、大きなその眼は見る事が出来なかつた。クララは、見つめるほど、骨肉のいとしさがこみ上げて来て、そつと掌てのひらで髪から頬を撫なでさすつた。その手に感ずる暖いなめらかな触感はクララの愛欲を火のようにした。クララは抱きしめて思い存分いとしがってやりたくなつて半身を起して乗しかかつた。同時にその場合の大事がクララを思いとどまらした。クララは肱ひじをついて半分身を起したままで、アグネスを見やりながらほろほろと泣いた。死んだ一人児ひとりごを母が撫でさすりながら泣くように。

弾条ぜんまいのきしむ音と共に時計が鳴り出した。クララは数を数え

ないでも丁度夜半よなかである事を知っていた。そして涙を拭いもあえ

ず、静かに床からすべり出た。打合せておいた時刻が来たのだ。

安息日が過ぎて神聖月曜日が来たのだ。クララは床から下り立つ

と昨日堂母ドーマに着て行つたベネチヤの白絹を着ようとした。それは

花嫁にふさわしい色ほかだった。しかし見ると大椅子の上に昨夜母の

持つて来てくれた外の衣裳ほかが置いてあつた。それはクララが好ん

で来た藤紫のひとそろい揃ひだった。神聖月曜日にも聖ルサンフィノ寺院で

式があるから、昨日のものとは違つた服装をさせようという母の

心尽しがすぐ知れた。クララは嬉しく有難く思いながらそれを着

た。そして着ながらもこれが両親の許しを得た結婚であつたな

らばと思つた。父は恐らくあすこの椅子にかけて微笑しながら自分を見守るだろう。母と女中とは前に立ち後ろに立ちして化粧を手伝う事だろう。そう思いながらクララは音を立てないように用心して、かけにくい背中のボタンをかけた。そしていつもの習慣通りに小箆筒こだんすの引出しから頸飾くびかざりと指輪との入れてある小箱を取出したが、それはこの際になつて何んの用もないものだと思つた。クララはふとその宝玉に未練を覚えた。その一つ一つにはそれぞれの思出がつきまつていた。クララは小箱の蓋ふたに軽い接吻を与えて元の通りにしまいこんだ。淋しい花嫁の身じたくは静かな夜の中に淋しく終つた。その中うちに心は段々落着いて力を得て行つた。こんなに泣かれてはいよいよ家を逃れ出る時には

どうしたらいいだろうと思つた床の中の心配は無用になつた。沈んではいるがしやんと張切つた心持ちになつて、クララは部屋の隅の聖像の前にひざまず跪いてあかり燭火を捧げた。そして静かに身の来こし方かたを返り見た。

幼い時からクララにはいい現わし得ない不満足が心の底にあつた。いらいらした気分はよく髪かみの結むすい方、衣服の着せ方に小言をいわせた。さんざん小言をいってから独りになると何んともいえない淋しさに襲われて、部屋の隅でただ一人半日も泣いていた記憶よみがえも甦よみがえつた。クララはそんな時には大好きな母の顔さえ見る事を嫌つた。ましてや父の顔は野獸やじゆうのように見えた。いまに誰れか来て私を助けてくれる。堂母ドームの壁画びやくにあるような天国に連れて行つ

てくれるからいいとそう思った。色々な宗教画がある度に自分の行きたい所は何所どこだろうと思ひながら注意した。その中うちにクララの心の中には二つの世界が考えられるようになりだした。一つはアツシジの市民が、僧侶をさえこめて、上から下まで生活している世界だ。一つは市民らが信仰しているにせよ、いぬにせよ、敬意を捧げているキリスト基督及び諸聖徒の世界だ。クララは第一の世界に生い立たつて榮耀えいよう榮華えいげを極むべき身分にあつた。その世界に何故かつごう渴仰の眼を向け出したか、クララ自身も分らなかつたが、當時ペルジヤの町に対して勝利を得て独立と繁盛との誇りに賑やか立たつたアツシジの辻つじを、豪奢ごうしゃの市民に立ち交りながら、「平和を求めよしか而して永遠の平和あれ」と叫んで歩く名もない乞食の姿

を彼女は何んとなく考え深く眺めないではいられなかった。やがて死んだのか宗旨代がえをしたのか、その乞食は影を見せなくなつて、市民は誰れはばか憚らず思うさまの生活に耽ふけつていたが、クララはどうしても父や父の友達などの送る生活に従つて活いきようと思ふ心地こころはなかった。その頃にフランシス——この間まで第一の生活の先頭に立つて雄々しくも第二の世界に盾たてをついたフランシス——が百姓の服を着て、子供らに狂人と罵ののしられながらも、聖ダミヤノ寺院の再建さいこんかんじん勸進にアツシジの街に現われ出した。クララは人知れずこの乞食僧の挙動を注意していた。その頃にモントルソリ家との婚談も持上つて、クララは度々自分の窓の下で夜おそく歌われる夜曲を聞くようになった。それはクララの心を躍おどらしと

きめかした。同時にクララは何物よりもこの不思議な力を恐れた。その時分クララは著者の知れないある古い書物の中に下のよう
な文句を見出した。

「肉に溺れんとするものよ。肉は靈への誘惑なるを知らざるや。心の眼鈍きものはまず肉によりて愛に目ざむるなり。愛に目ざめてそを嘔むものは靈に至らざればやまざるを知らざるや。されど心の眼さときものは肉に倚らずして直に愛の隠るる所を知るなり。聖処女の肉によらずして救主を孕み給いし如く、汝ら心の眼さときものは聖靈によりて諸善の胎たるべし。肉の世の広きに恐るる事勿れ。一度恐れざれば汝らは神の恩恵によりて心の眼さとく生れたるものなることを

「覚るべし」

クララは幾度もそこを読み返した。彼女の迷いはこの珍らしくもない句によつて不思議に晴れて行つた。そしてフランシスに対して好意を持ち出した。フランシスを弁護する人がありでもすると、嫉妬を感じないではいられないほど好意を持ち出した。その時からクララは凡ての縁談を顧みなくなつた。フォルテブラツチヨ家との婚約を父が承諾した時でも、クララは一応辞退しただけで、跡は成行きにまかせていた。彼女の心はそんな事には止つてはいなかつた。唯心を籠めて淨い心身を基督に献じる機ばかりを窺つていたのだ。その中に十六歳の秋が来て、フランシスの前に懺悔をしてから、彼女の心は全く肉の世界から逃れ出る事が出

来た。それからの一年半の長い長い天との婚約の試練も今夜で果てたのだ。これからは一人の主にも心も献げ得る嬉しい境涯が自分を待っているのだ。

クララの顔はほてって輝いた。聖像の前に最後の祈を捧げると、いそいそとして立上った。そして鏡を手にとって近々と自分の顔を写して見た。それが自分の肉との最後の別れだった。彼女の眼にはアグネスの寝顔が吸付くように可憐に映った。クララは静かに寢床に近よって、自分の臥ねていた跡に堂母ドーマから持帰った月桂樹の枝を敷いて、その上に聖像を置き、そのまわりを花で飾った。そしてもう一度聖像に祈禱を捧げた。

「御みこころ心ならば、主よ、アグネスをも召し給え」

クララは軽くアグネスの額に接吻した。もう思い残す事はなかつた。

ためらう事なくクララは部屋を出て、父母の寢室の前の板床いたゆかに熱い接吻を残すと、戸を開けてバルコンに出た。手欄てすりから下をすかして見ると、暗やみの中に二人の人影が見えた。「アーメン」という重い声の下から響いた。クララも「アーメン」といつて応じながら用意した綱で道路に降り立った。

空も路みちも暗かつた。三人はポルタ・ヌオバの門番まいないに賂やすやして易々すと門を出た。門を出るとウムブリヤの平野は真暗に遠く広く眼の前に展ひらけ亘わたつた。モンテ・ファルコの山は平野から暗い空に崛起くつきしておごそかにこつちを見つめていた。淋しい花嫁は頭巾ずきんで

深々と顔を隠した二人の男に守られながら、すがりつくようにエホバに祈禱を捧げつつ、星の光を便りに山坂を曲りくねって降りて行つた。

フランシスとその伴侶との礼拝所なるポルチウンクウラのなかま小しょう龕がんの灯ともが遙か下の方に見え始める坂の突角に炬火たいまつを持った四

人の教友がクララを待ち受けていた。今まで氷のように冷たく落着いていたクララの心は、瀕死者ひんししやがこの世に最後の執着を感じずるよういきびしく烈はげしく父母や妹を思つた。炬火の光に照らされてクララの眼は未練にももう一度涙でかがやいた。いい知れぬ淋しさがその若い心を襲つた。

「私のために祈つて下さい」

クララは炬火を持った四人にすすり泣きながら歎願した。四人はクララを中央に置いて黙ったままうずくまった。

平原の平和な夜の沈黙を破って、遙か下のポルチウンクウラからは、新にいよめ嫁を迎うべき教友らが、心をこめて歌いつれる合唱の
声が、静かにかすかにおごそかに聞こえて来た。

(一九一七、八、一五、於うすいとうげ碓氷峠)

青空文庫情報

底本：「カインの末裔 クララの出家」岩波文庫、岩波書店

1940（昭和15）年9月10日第1刷発行

1980（昭和55）年5月16日第25刷改版発行

1990（平成2）年4月15日第35刷発行

底本の親本：「有島武郎著作集」第三輯、新潮社

1918（大正7）年2月刊

初出：「太陽」

1917（大正6）年9月

入力：鈴木厚司

校正：染川隆俊

2001年2月14日公開

2005年9月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

クララの出家

有島武郎

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>